
高校 さようなら

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校 さようなら

【Nコード】

N3125R

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

卒業式。卒業しちゃいました。

(前書き)

自分のことを書いたエッセイだから、物語じゃないです。

三年前の入学式の日のことを思い出していた。

桜の花が冷たい雨に打たれ、弱弱しく弾かれた雨粒は黒いコンクリートに吸い込まれていった。

母は私の新しい制服が登校初日に濡れることを嘆きながら、私の少し前を早歩きで歩いていた。

高校までの長い上り坂を上るのは三度目。一度目は入学試験。二度目は合格発表のとき。まったくこの学校に通う気はなかったのに、先輩のいる憧れの高校に落ちて、私は自分の惨めさを感じながら、この高校に入学した。

いつ私はこの高校から海が見えることに気がついたのだけ。海の青が空の青とは違うことを、そして毎日その色を変えることを知るころには、私はこの高校にすっかり馴染んでいた。

私は大掛かりな予行練習をしているかのような気持ちで、校長の式辞を聞いていた。

全然卒業の実感が湧かなかった。また登校日がくるような気がしていた。

感慨深い。そんな言葉じゃ表せられない。この複雑な気持ちは。私の胸の中は、新しい世界への期待と不安からくるドキドキと、今までの世界への執着でぎゅうぎゅうに詰まっていた。だからもう誰の言葉も入らないし、何も考えられなかった。

いつの間にやら三回も文化祭を繰り返したんだ。体育祭だって球技大会だって「これが最後だ」と気合を入れて臨んだことは覚えている。だけどいつの間にか三回目が終わっていたんだろう。

校歌斉唱。配られた栞を開く。私は校歌を口ずさむ。一度だけ音が外れてしまった。私の口から飛び出した迷子の「♪」は、大勢で行進を続ける「♪」の中に流されていった。

そうしてアツと言う間に、それこそボーっとしてる間に、私の卒業式が終わった。

色紙いっぱい言葉が埋まっても、私の心には誰の言葉も入らない。だって、もういっぱいいいだから。何も考えられなかった。ばかみたい「絶対会おうね」とか「楽しかった」とか「大好き」とか書いて、書かれて。でも「さようなら」は何処にも書いてはいなかった。

この乱雑とした教室の光景は、もう絶対に見られないものなんだって、私はちゃんと実感できない。式が通り過ぎていったように、最後のホームルームも通り過ぎていってしまうのだろうか。そんなの嫌だ。

誰かどうか、私に教えて。これが「最後」なんだって。もうみんな制服で集まることなんてないんだって。分かっているはずなのに、理解が出来ない。

何故だか分からないけど、にくまんのような担任が、言葉を詰まらせ、教室でひとりひとりの名前を呼び、証書を渡した時、私は唐突に卒業の意味を知った。

もうオワリって。オシマイって。そういうことなんだって。

ぎゅうぎゅう詰めで何も入らなかった私の胸に、ドラゴンボールの「魔人ブー」のような担任が私の名前を無理やりに押し込んだから、「頑張れよ」て言ったから、握手とかしちゃったから、溢れ出しちゃって、決壊しちゃって、とても苦しくなってしまった。

三年前のあの時、トボトボと歩いていた道を、私は全てを見逃さないように、景色を目に焼き付けるように、一步一步踏みしめて歩いた。少しでも期待した早咲きの桜は、まだ固いつぼみを大事そうに抱えていたし、弱い雨が降り出した白い空に、見えるはずの海は曖昧に溶けてしまっていた。だけど忘れなくなかった。これが最後の下校だと思うと、長い下り坂に、紺色の制服がずらりと並ぶこの光景をとっても愛おしく思った。

ありがとう。

（後書き）

卒業したくなかった。

気持ちを整理する意味で、書きました。

みんな！ 大好き！！

ああ、でも、卒業したくなかった。

「また会おうね」と言うのと「明日、学校で」と言う言葉がなんと違うのか！！

読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125r/>

高校 さようなら

2011年10月8日01時07分発行